

【研究課題名】

EGFR 阻害剤後の T790M 変異による獲得耐性と治療前の肺癌組織検体における TP53 遺伝子変異との関係を検討する研究 (承認番号: 2019-100)

【研究期間】

倫理委員会承認後～2020年7月30日

【施設】

大阪国際がんセンター呼吸器内科(共同研究の代表施設)、大阪市立大学大学院医学研究科呼吸器内科・臨床腫瘍学、大阪はびきの医療センター肺腫瘍内科、石切生喜病院呼吸器内科、ベルランド総合病院呼吸器内科、独立行政法人国立病院機構近畿中央呼吸器センター呼吸器腫瘍内科、神戸市立医療センター中央市民病院呼吸器内科、独立行政法人国立病院機構大阪刀根山医療センター呼吸器腫瘍内科、大阪急性期・総合医療センター呼吸器内科、県立広島病院呼吸器内科でデータ収集し、和歌山県立医科大学第三内科学講座にて腫瘍組織を用いた遺伝子発現の測定を行います。大阪国際がんセンター呼吸器内科にてデータの解析を行います。

【研究の意義・目的】

T790M 遺伝子発現を EGFR チロシンキナーゼ阻害薬治療前から予測することができれば、どの EGFR チロシンキナーゼ阻害薬を初回治療として使用するのが良いか治療戦略を考える上で非常にメリットが大きい。肺癌細胞における TP53 遺伝子変異は、その存在が肺癌細胞の更なる遺伝子多型を誘発する可能性があり、獲得耐性時に T790M 遺伝子変異検出頻度に関わる可能性がある。TP53 遺伝子変異が T790M 遺伝子発現と関連する事が判明すれば、治療戦略上 EGFR チロシンキナーゼ阻害薬の使い分けを行う上で非常に有利であり、上記関連性を調べる意義は大きい。

【研究の方法】

EGFR 遺伝子変異陽性進行非小細胞肺癌において初回治療で EGFR チロシンキナーゼ阻害薬の投与を受けた肺癌患者を対象に、患者背景、癌の種類、EGFR 遺伝子変異の type と測定方法、過去の治療歴、治療期間・PD の場所、PD 時の T790M 遺伝子変異の結果、初回治療前の肺癌の診断した検体の免疫染色結果などのデータを解析します。過去に採取したがん組織が小さい場合、本研究での使用によって組織量が更に少なくなったり消失したりする可能性があり、その後の追加検査に支障が生じたり追加検査が出来なくなることが稀にあります。この掲示をご覧いただき、「ご自身のがん組織の試料とデータの利用を希望しない」場合には、下記連絡先までご連絡くださいますようお願い申し上げます。その場合でも患者様に不利益を生じることはございません。

【研究組織】

研究代表者: 大阪国際がんセンター 呼吸器内科 主任部長 熊谷 融

研究責任者: 大阪国際がんセンター 呼吸器内科 主任部長 熊谷 融

【本研究に関する問い合わせ先】

研究事務局 小川 晃一

住所 大阪市阿倍野区旭町1丁目4番3号

電話 06-6645-3793

E-mail : ogawa.koichi@med.osaka-cu.ac.jp

研究への参加を希望されない場合は、上記への連絡をお願いいたします。大阪国際がんセンター呼吸器内科臨床研究に関する情報公開(URL: <https://oici.jp/center/clinical/research/houkatu/kokyuukinaika/>)に本研究の詳細が記載されております。